

《連載》

## 至誠の足跡（2）

# 自己の内の真心を提唱した作家 武者小路実篤

### 【要約】

西田哲学の実践は、「至誠」といいます。自分や他者を害するエゴイズムにきづいて、自分他人を害さずして、世界を作っていくという実践指針です。日本は、そういう土壌が昔からあるわけで、多くのひとが同様のことを言っています。前3号では、陶芸家の河井寛次郎を紹介しましたように日本の芸術家には、こういう自己の底に働く自己を越えたものを表現した人が多いのです。今回は、武者小路実篤を紹介します。

●Key words : 武者小路実篤、新しき村、自己の内にある真心、人類の真心

### 武者小路実篤

自己を観察して自己とはどういうものであるか探求するという伝統が日本にはありました。芸術家、宗教者、作家、精神科医などが深い自己の表現やそこに至る実践について語っています。今回は、作家であった武者小路実篤を紹介します。

武者小路 実篤（むしやのこうじ さねあつ）という小説家がいきました。1885年（明治18年）に生まれ、1976年（昭和51年）に亡くなりました。小説家でもあり、詩人・劇作家・画家、貴族院勅選議員でした。

人間が人間らしく生きることができる理想的な社会の実現を目指して「新しき村」を提唱しました。1918年（大正7年）に宮崎県児湯郡木城村に「新しき村」を建設しました。

実篤は農作業をしながら文筆活動を続けました。しかし、村はダム建設により大半が水没することになったため、1939年（昭和14年）には埼玉県入間郡毛呂山町に新たに「新しき村」を建設しました。実篤は1924年（大正13年）に離村し、村に居住せずに会費のみを納める村外会員となりました。晩年には野菜の絵に「仲良きことは美しき哉」「君は君 我は我なり されど仲

良き」などの文を添えた色紙を揮毫しました。1955年（昭和30年）、70歳で調布市仙川に移住、亡くなるまでこの地で過ごしました。

小説『愛と死』『友情』『真理先生』など、文庫で読むことができます。

### 深い実践的精神をあらわす

彼の文章には「自然」「人類」という言葉がよく出てきますが、西田哲学でいう意識的自己を超えたものが底から働いている、絶対的の者に類似しています。他者を害することの多い現代にも傾聴すべき生活指針のようであり、類似性をあきらかにする研究が望まれます。簡単にみておきましょう。

実篤に、次の言葉があります。

「自分の使う「自然」とか「人類」とか言う言葉のわからない人が可なりいるらしい。しかし自分は遠慮なく自分の適当と思う処につかう。それでわからない人にはわからなくていいと思っている。現在わかってくれる人も沢山いる。この言葉の暗示することを意識的に知ることが出来たならばその人は人間ではなく神様だ。自分はその人の前にひざま跪ひざまずく。」

（「自然とか人類とか云う言葉」）

わからないひとがいるというのですから、生物学的な、動物、人類とは違う意味になります。次のようにいいます。

「僕がよく人類という言葉をつかうのを、君はどういう意味か知らせてくれとおっしゃいましたから、ここで一寸出来るだけお知らせしたく思います。（略）

個人の深い処を動かしている、万人共通のもの、それを自分は神と言うよりはもっと現実的な言葉である人類と言う言葉をもって顕すのが一番真に近いと思うのです。」（「人類と言う言葉」）

「人類の真心に従って生きる。人類の真心、自己の内にある真心によって生きる。それに背かずに生きる、そこに安住と、何ものも恐れぬ力を感じず。」（「新しき村の信仰」）

こうした実篤の言葉によれば、真心はすべての人の深いところを動かしているものです。人間に共通に、内奥に働くものようです。これは、人の共通の根源はどういうものであるかという「実在論」にあたります。実在論がどういうものであるかによって、生活態度、行動指針がちがってきます。それは「実践論」の問題です。西田哲学の実践指針は至誠です。どのような職務であろうとも、それを遂行することは、世界創造、ポイエシスです。それをしながら、同時に至誠で行動して自己を生長させる、プラクシスです。世界創造と自己生長とが同時、一つであるという実践指針です。

実篤の行動精神も、西田哲学でいう「至誠」に類似しています。他者を害するエゴイズムを批判します。仕事や思想など違う他者との共生をいいます。「至誠の人」の一人とみられます。次は、「新しき村の精神」の

一節です。

「全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させる事を理想とする」

「自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない」

「自己をただしく生かすようにする。自分の快樂、幸福、自由のために、他人の天命と正しき要求を害してはいけない。」

### 実篤の精神と西田哲学の実践指針

西田哲学は、われわれの意識できる自己（意志的自己、叡智的自己）を超えたものが内奥に働いていると教えています。絶対的一者、絶対無といいますが、静態的な場所ではなくて、根底から働くものです。内からの形成力です。私たちは意識できないが、働いているというのです。

「かかる世界の全体的的自己限定として、どこまでも個物的多を即ち我々の自己を把握し、我々の自己を動かすものがデモーニッシュと考えられるものである。それは単に我々の自己を否定するのではない、これを否定すると共にこれを包みこれを活かす力をもったものである。それは神的でもない人間的でもない、しかし悪魔的でもない、それは何等の帰結をも明らかにせないのが偶然に似ているがそれは連関を予示するから神の摂理にも似ているのである。歴史的世界的においては、いつもかかるデモーニッシュな力が働いている。それは単に本能的というものではない。それを越えたものである。精神的形成作用的である、私のいわゆる無作用的作用型的である。」

（西田幾多郎『実践哲学』【10:108】）

「どこまでも超越的なるものが内在的として、即ち矛盾的自己同一的世界の全体的的自己限定として、

我々の自己を把握するものは、デモーニッシュなものでなければならない。作られたものから作るものへと  
して、歴史的世界の底から我々を動かすものは、かかる力  
でなければならない。それはなお自己自身の目的を自覚せ  
ない無限の形成力である。」(西田幾多郎『ポイエシスと  
プラクシス』【10:166-7】)

西田哲学の実践指針は、独断の抑制、「至誠」です(注3)。

武者小路実篤の精神と西田哲学の類似性の研究も興味ある課題です。

### 武者小路実篤の足跡案内

実篤を偲ぶ場所として、宮崎県と埼玉県に「新しき村」がありますし、東京には、実篤の邸宅跡があり隣接して記念館があります。今回は、埼玉の「新しき村」と東京の邸宅や記念館の2か所を案内します。

### 新しき村(埼玉)

東武鉄道越生線の武州長瀬駅から徒歩20分くらいです。武蔵野霊園の前で左折し、丸山畳店のところを右折します。坂道をゆくと、左に毛呂山台会館があるところを右折し、まっすぐすすみますと、田んぼになります。あぜ道をすすむと、新しき村にはいります。こちらは、門柱のあるのとは反対のほうから、村にはいります。こちらから入ると、大愛堂が見えます。実篤夫妻や村の内外の会員の遺骨が眠るところです。右手の丘に登ると、増田荘や新しき村生活文化館のある場所に出ます。

右へ行くと新しき村美術館(写真1)があり、実篤の作品の日本画、油絵、デッサン、画卷、書などのほか実篤愛蔵の書画など約300点を収蔵・展示しています。(『新しき村について』注1)

村内には、美術館のほか、現在も住む村内会員の住

居、作業場、新しき村生活文化館、村人のための食堂などの施設が点在しています。

JR八高線線の毛呂駅から行くと、入口に標柱が立っています。「この道より我を生かす道なしこの道を歩く」と書いてあります。もう少しゆくと、2本の標柱(写真2)があります。「この門に入るものは自己と他人の」「生命を尊重しなければならない」とあります。

(写真1) 新しき村美術館



(写真2) 入口の標柱



## 調布市武者小路実篤記念館

実篤は、晩年に調布市に住みましたが、実篤の死後、遺族から調布市に寄贈され、愛蔵品、遺品、邸宅などが、調布市武者小路実篤記念館、実篤公園で保存・公開されています。（注2）

京王線仙川駅で下車、南口の交番の先の信号を右折して歩きます。児童公園のところまで左折して道なりにすすむと実篤公園があります。駅から10分です。

実篤公園は、旧実篤邸（写真3）のほか、湧水を水源とした大小の池、コブシ、サクラ、ツバキなどの花木があり、四季折々の風情を感じることができます。旧邸の内部は、土日曜日、祝日に公開されます。平日はベランダから窓越しに見ることができます。

調布市武者小路実篤記念館（写真4）は、邸宅の隣接地に昭和60（1985）年に開館し、実篤の原稿や手紙、画や書、著作をはじめ、愛蔵の美術品や交友のあった人々の作品や資料などを収蔵しています。

（写真3）武者小路実篤旧邸



（写真4）調布市武者小路実篤記念館



## 文献

西田幾多郎

西田幾多郎の著作からの引用は、岩波書店、西田幾多郎全集（昭和40年—41年）により、第11巻54頁の場合【11:54】のように、巻数と頁を表示する。引用にさいしては、現代仮名遣い、現代漢字に書き改めている。

## 注

- 1) 新しき村の案内は、主に、一般財団法人 新しき村発行の『新しき村について』を参照した。
- 2) 調布市武者小路実篤記念館の案内は、主に、当記念館のパンフレット「調布市 武者小路実篤記念館・実篤公園」を参照した。
- 3) 「至誠」については、『マインドフルネス精神療法研究』3号、2017 p101～）『創造的直観への実践』日本マインドフルネス精神療法協会）